

# 美しき副官の献身

『ハッ! 隊長殿のご命令ならば!』

筆祭競介

表紙イラスト: 秋月からす



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『美しき副官の献身 『ハッ！ 隊長殿のご命令ならば！』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



美しき  
副官の献身

『ハッ! 隊長殿のご命令ならば!』

筆祭競介

表紙 / 秋月からす

## 登場人物紹介

---

### Characters

#### クレア＝ブルームハルト

『氷の副官』と渾名される帝国軍女少尉。貴族出身で、ブロンドのストレートヘアとサファイアのごとき碧眼を持つ美女。二十一歳。

#### ラリゴ＝ヴァルストターク

帝国軍中佐。第四小隊隊長。かつて幼いころのクレアの命を救ったことがある。実直かつ、愚直な軍人として部下たちからの尊敬を集める。三十八歳。

先の大戦が終わっても、世界は軍事的に緊迫し続けていた。

※

帝国軍少尉クレア・ブルームハルトは、隊長室の前で一旦立ち止まった。通路の窓ガラスに映る自分の姿に視線を向けて、身だしなみを直す。

雪のような白肌にサファイアのごとき碧眼は、黒地に金糸の刺繍を施された軍服姿によく映える。ブロンドのストレートヘアに乗せている黒の軍帽子も同様だ。無論、軍服一式は詰襟にズボンと男性仕様ではあるが、『氷の副官』と渾名される、極端に感情の抑えられたクールな美貌をより引き立たせる効果があった。

切れ長の瞳に浮かぶ知性の煌めき。凛々しく引き結ばれた口許に見える意思の強さ。二十一歳という年齢に相応しい豊かな胸の膨らみや腰の丸みを差し引いても、彼女にはフリルのついたドレスより、この凛々しい軍服姿のほうが似合っていた。

クレアは自分の服装に不備がないことを確認してから、隊長室の扉をノックする。室内からの「どうぞ」の声に合わせ桜色の唇を僅かに開いた。

「失礼いたします」

ルックス同様、声も感情がよく抑えられていて、なにより美しい。

クレアは落ち着いた物腰で扉を開け、部屋に入る。広い室内には重厚な木製の机が一つ置かれており、そこには精悍な風貌の男が座っていた。

彼の名前はラリゴヴァルスターク。三十八歳になる帝国軍中佐で、クレアの所属する第四小隊の隊長である。副官職のクレアにとっては文字通りの上官にあたる人物だ。

帝国軍の若き女性少尉は改めて背筋を伸ばし、小気味よく右手をこめかみに当てる拳手——着帽時の軍規則に則った敬礼をする。

「お呼びでありますか、隊長殿」

対してラリゴは軽く手を上げ、副官に休めの指示を出す。

クレアは両手を腰の後ろで組み、両脚を肩幅に開いて話を聞く姿勢をとった。

「先ほど本部から我が第四小隊に極秘任務が下った。当作戦を遂行するにあたり、お前には特に重要な役割を務めてもらうことになる」

上官の言葉に副官は内心、心を躍らせた。作戦本部から直々の極秘任務ということはクレア自身が大きな武功を立てられるチャンスだ。ひいてはラリゴ隊長の評価アップにも繋がる。

『隊長に受けた恩を少しでもお返ししたい』

クレアの想いは、その一つに集約されている。

まだ自分が少女だった頃。敵軍の捕虜になりかけたクレアを救ってくれたのが、まだ一兵卒だったラリゴだった。帝国貴族の一人娘だった自分は、あるとき彼に助けられていなければ、どんな目に遭わされていたかわからない。

それでクレアの人生は決まった。

十五歳で軍学校に入學し、十八の時に首席で卒業。准尉の地位を与えられ、配属先としていくつもの将校の副官職を打診されたが、クレアの気持ちは決まっていた。

当時、第四小隊の隊長となつたばかりのラリゴ―ヴァルスタタークの下で働くこと。実際に部下になつてみると、あまりに軍や帝国のことしか考えていない彼の性格に驚いたが、同じ軍人としてさらに心酔することになった。加えて実際に戦場に出るようになってからは、それこそ隊長に命を助けられたことは一度や二度ではない。

あらゆる私心を捨てて四六時中尽くし、歴戦の部下たちから『氷の副官』と渾名されるほど副官の任務に徹しても、まだ彼には尽くし足りない気持ちであつた。

——この任務を上手く成功させれば、隊長殿のご恩に少しでも報いられる。

しかし内心の歡喜は一切表情に出さず、クレアは「光榮であります」と答えるに留めた。副官たるもの冷静さが第一である。

そんな部下の返答に、上官は「うむ」と満足そうに頷いた。

「我が帝国軍の女性士官を、容姿及び軍への忠誠心などで選抜したところ、お前がダントツの評価で選ばれたのだ。光榮に思つてもらつて差し支えない」

——容姿？

クレアは内心、首を傾げたが「ハッ」と同意の返答をするに留める。しかし次の隊長の

クピクと引き攣り、戸惑いの色が濃く浮かぶ。

——こ、これが……男……。

なにより見慣れない男性器官の姿形に目を丸くした。帝国貴族の娘として生まれたクレアは、物心がついてより父親のモノすら目にしたことになかったのだ。ペニスとは、まるで蛇や亀の頭のような形状をしているものだったのか。黒光りする肉幹上では赤と青の血管がビクビクと脈動し、肉棒全体を反りかえしている。

——なんてグロテクスな姿だ……。まるで怒り狂う蛇神ではないか……。

その姿は、幼い頃母親に読み聞かせてもらった神話に出てくる邪神を思わせる。

「ほれ。いつまでジッと見てるんだ。早くしてくれないと、男の大事なところが風邪をひいちまうぜ」

軍曹のセリフでハッと我に返った。今の自分が、相手になにを命令されても従わなくてはいけない立場であることを思い出す。

クレアはグイッと突き出された男根に恐る恐る顔を寄せ、慎重に肉先をペロリと舐めた。

「……………」

熱い。そして想像以上に硬い。唾液に溶けだすように、牡臭さを煮詰めたようなしょっぱい味が舌先に滲み出す。

「ふううつ。そのたどたどしい舌使いにソソられるぜえ」

熱っぽい吐息とともに、武骨な中年男がクレアの髪を弄びはじめ。ストレートのロングヘアを一房掴んではサラサラと落とすし、その癖のない感触を楽しんでいる。幼い頃より手入れが行き届いているからこそその艶やかな髪質は、貴族の子女ならではであった。

その事実と今自分のしている行為のギャップを思い、眉間の皺が深くなる。

「どうだ。初めて舐めたチンポの味は？」

「……し、しょっぱい……です」

「こりゃ済まねえ。ここ最近、あんまりシャワーを浴びてなかったからよ。それともさつきしたシヨンベンの残りかもな。へへへっ。残尿が気になりはじめる年頃だよお」

軍曹は面白い冗談でも言ったつもりのように、ぐはははっ、と笑い改めてグイッと腰を突き出してきた。

「ほら。そんな恐る恐るペロペロしてるだけじゃ男は満足しないぜ。ぱっくりと俺の汚いチンポを啜えて、自分の涎で洗うみたいにしやぶつてくれよ」

舐めるだけでは満足せず、さらにコレを口に啜えろというのか。男という生き物はどこまで変質的なのだ。しかもそれが軍曹だけの性癖でないことは、他の兵士たちも同様に顔を期待に輝かせ、自分の口許に注目していることから察せられる。

「……っん……んんっ……」

クレアは大きく口を開くと、覚悟を決めて男のペニスを啜えた。ファーストキスすら経

験のない唇で、剛直した牡肉を絞ることになる。

——なんて熱さだ……。

密着させた唇の柔らかな弾力層にジンジンとその熱が侵食し、今にも茹つてしまひそうだ。加えて唾液に溶けだす牡臭さの密度も跳ね上がる。こちらが相手を啜えているにもかかわらず、口の内側から立ち昇るその匂いによつて、まるでクレアのほうが男に飲み込まれているような錯覚に陥る。

対して仁王立ちしている中年男は、はあつ、と心地よさそうな吐息をついていた。

「普段から氷みてえなツラしてるくせに、口の中はあつたけえなあ。唇もプリプリしてるし、舌のしなやかさも申し分ねえ。少尉殿のお口は、俺たちに偉そうな命令をするよりも、こんなふうにも男のチンポをしゃぶるほうが合つてみたいだぜ」

度重なる部下の侮蔑に、さすがのクレアもカチンときた。ペニスを啜えたまま、相手の男を睨み上げる。お前の一番の弱点は、今私の口の中にあるのだぞ。一思いに歯を立てて噛みちぎってやろうか。そんな思いが視線に籠る。

しかし見下ろす軍曹の顔に浮かんだのは、脅えではなく歡喜の笑みだ。

「ああ、たまんねえぜ。マジな殺意を込めた視線で睨み上げてくる女に、チンポを啜えさせるシチュがたまんねえ。この歳になるとよお。上っ面だけのテクじゃなくつて、こーゆーマジなシチュにこそ激しく燃えるようになつちまうんだ。へへへつ。その中でも、年

下の上官殿にチンプをしゃぶらせてる今はサイコーの気分だぜ」

戦場で人を殺しすぎて通常の感覚が麻痺しているに違いない。まるでヤバイ薬でもやっているように恍惚とした顔をしている。自分たちを取り囲む男たちも同様だ。どいつもこいつも、締まりのない顔をして……。

冷静な表情をしているのはデスクに座っているラリゴだけだった。

——ああつ。隊長殿……。

このフェラチオ相手が中佐だったら、どれだけよかつただろうか。命じられるまま、心を込めて奉仕したのに。

そこまで考えてハツとする。

私はなんて思い違いをしているのだ。これは実戦訓練。そして任務にあたれば、敵国の男を相手に同じことをしなくってはならない。こんな調子では、とても目的を完遂することができない。

そう考えた瞬間、ラリゴ・ヴァルスタークの副官として三年に渡り叩き込まれた軍人魂に火がついた。己の全ては任務成功のために存在している。そのためならなんでもする。その覚悟があるからこそその士官ではないか。

「おおっ!! つ……」

それまで余裕の笑みを口許に浮かべていた軍曹が、愉悦を噛み締めるような声を上げた。

飲み込んだ蛇の頭のような肉先を、クレアが口腔粘膜で磨くようにむしゃぶりと回しはじめたからだ。ペニスの形に合わせて、密着させた唇が卑猥に形を変えていく。舌も使った。たつぷりと唾液を乗せて裏筋を舐め、カ리를ねぶり、先端の小穴を何度も突く。

クレアは帝国軍人の誇りにかけて、部下のペニスをむしゃぶりと回した。んふ、んふ、と漏れる鼻息はいつしか嫌悪や困惑ではなく、熱心なものへと変化している。

——これが一番、気持ちいいみたいね。

窄めた唇で肉カリの段差を扱きながら、龟头全面をゆつくりと舐める。この行為を繰り返すと、軍曹が口の奥で「うううう」とくぐもつた喘ぎ声を漏らした。相手の弱点を発見したら、あとはそこを徹底的に攻めるだけである。

——この勝負、貰ったわ。

クレアにとっては、部下に対する口唇奉仕すらも一対一の戦闘行為となっていた。攻略するべき目的があるのなら、それがたとえなんであれ作戦行動だ。若くして少尉の階級を与えられ、実戦部隊副官の地位にある自分のフィールドである。戦場でのカンのよさや、戦況判断能力に關してはラリゴ隊長にすら一目置かれていた。

加えてクレアには貴族の娘ならではの洗練された美貌がある。高名な画家が渾身の筆捌きで刷いたような柳眉を悩ましげにより合わせ、気品が漂う碧い瞳を上目使いで潤ませる。常に無表情を保っていたその顔にあからさまな媚を浮かべると、瞬く間にペニスの硬度が

跳ね上がった。予想以上のレスポンスに、自分の容姿がこの手の『戦闘』において最高の武器になることをデータとして認識する。

「こいつは驚いたぜ。……おおうつ、た、たまらねえ。イクぞ。このまま出すからな。副官殿の口の中に俺のザーメン、たつぷりとぶちまけてやるからな」

しかし性に関して、基礎的な知識が圧倒的に不足していた。

——イクとはなんだ？

軍曹のセリフを聞く限りでは、尿とは違うなにかをペニスから排泄するらしい。そしてその行為は、男にとつてたまらない快感のようだ。

ならば好きにするがいい。

クレアはさらに熱心に舌を躍らせた。肉棒の先端を、まるでその丸みを磨き込むようにたつぷりと涎を乗せて舐め回す。ビクビクと腰を小さくガクつかせはじめた相手のペニスを逃がさないため、唾える唇を絞り込む。彼のズボンを掴む指先にも力が籠る。

「おおうつ。飲むなよ。口の中に溜めておけよっ！」

中年男はそう叫ぶと、クレアの後頭部を掴み、逃亡を防ぐようにして肉棒を激しく脈動させた。

ドギユドぶどりゅんっ！ ドブどぶどギユどぶんっ！

口内に男の生臭さを煮詰めたような粘液が、凄まじい勢いで流し込まれる。

ぬりんっ。

「んんんっくっくっ！」

股間から迸った雷のような快感の閃光に、クレアは全身を息ませた。

責められたのはブロンドの茂みとローズピンクの牝華の境界線にポツンとある小さな突起——クリトリスだった。曹長が人差し指の腹に、二人の結合部分からたつぷりと溢れ出ている愛液をすくいとり、牝芽にクリクリと塗りつけてくる。

ビゲンっ！　びびくんっ！　ヒクびくくんっ！

僅か数ミリの小さな器官を責められただけで、全身の筋肉が激しくビクついてしまう。

「ほほう。少尉殿はアソコの感度が抜群なクセに、こっちはもっと敏感みたいだな。おおうっ。俺の指の動きに合わせて、オマ○コの中がきゅっきゅと締めまりやがる」

武骨な中年男の硬い指が、半分皮を被っている牝芽を剥くように擦り上げてくる。

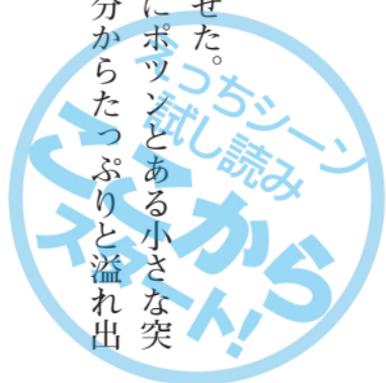
「んはああっ！　らめええっ！　ソコらめええええっ！」

クレアはたまらず口内のペニスを吐き出し叫んでいた。背中を弓反り、両手で掴んでいる肉棒を、無意識に力一杯握り締めてしまう。

「あッうっ！」「イテっ！」

左右の男たちが、たまらず悲鳴を上げた。

「おいおい。そんなんじゃないやあ、とても実戦で役に立たないぜ。肉体を自分の意思でコント



ロールするのは軍人の基本だって、いつもニコリともしねえクールなツラで俺たちに説教してたじゃねえか」

軍人としての在り方までも当てこすられては、抵抗しないわけにはいかない。クレアは改めて左右のペニスを握り締めようとした。執拗な陰核責めに、思わず白目を剥きそうになるが、それでも耐えきれない肉悦ではない。帝国軍人としての矜持を振り絞り、男たちが喜ぶように、大胆に舌を出して男根を舐めてやろうとする。しかし――。

「つひいいいいいいいいいっ！」

クリトリスを擦る指を、曹長が人差し指から親指にかえた。擬音にすれば『ヌルヌル、クリクリ』といった陰核責めが『ズルズル、グリグリ』と強化される。

ビグビグひくくンっ！　ビグひくくンっ！

まるで電気椅子にでも座らされているように、全身が激しく痙攣する。とても他人に奉仕する余裕はない。ペニスに伸ばしかけていた両手を強く握り締め、背筋が何度も跳ね上がる。美しいベル状の乳房をダイナミックに弾ませ続ける。

「どうだおら！　いくら偉そうなご託を並べても、自分がただの牝犬だってことを思い知ったか！　おらおらおらあぁっ！　今、どんな気持ちか言ってみろ！」

曹長は激しくクリトリスを擦り上げながら、腰の動きも再開させた。あまりの肉悦に極限まで収縮する蜜壺を、野太いペニスが情け容赦なくえぐり抜いていく。

「いいっ！ イイイイ！ クリクリぜっぐずきぼちいいいいっ！」

官能の涙と汗と涎で、ノーブルな美貌をぐちゃぐちゃにしながらクレアは叫んだ。

それは命令されて口走る苦々しい白状ではなく、魂の实感を言葉にかえた生々しい告白。『氷の副官』と畏怖を込めて渾名されていた女の面影は残っていない。初体験でコナゴナに碎かれた氷の仮面は、自身の女体から吹き上がる肉悦の炎によって、すでに跡形もなく汗や愛液となつて溶け出てしまつていた。帝国貴族の子女として、帝国軍人の士官として、何層にも塗り固められた理性のシールド——それが女体深くまでえぐり込んであるペニスによつて剥ぎ取られ、今では本能の赴くまま官能に啜り泣く牝獣と化していた。

「ス、スゴすぎる……」「ハンパねえ……」

奉仕を中断された周りの男たちも、クレアが見せる余りの痴態に見入つていた。

くねる女体はとめどなく噴き出る官能の汗により、まるで油でも塗りつけたようにテラテラと濡れ光り、しなやかな筋肉の痙攣をくつきりと浮かび上がらせている。

なにより全身痙攣の震源地である女性器は、最も激しく反応していた。

入り口から最深部まで、みっちりと牡肉と密着している無数の膣襞が、まるで一つの生命体のようにくねり狂っている。激しい収縮と煽動を繰り返して中のペニスを絞り抜き、突発的な痙攣が官能的すぎるアクセントをもたらしつていた。

「うおおおっ。——ツツ！ こ、こりゃ、たまらねえっ！」

セックスと言葉の両面で、激しく上官を責め続けていた曹長も、とうとう限界に達したようだ。ビクつくクレアの両脚を改めて抱え、骨盤同士をぶつけあうような激しい突入を開始する。

また来る。あの灼熱の衝撃がやってくる。初体験の時とは比べものにならないほど官能を練り上げられた今の子宮にザーメンを直撃されたら――。

想像しただけで頭の中が真っ白になった。女体のビクつきが限界を超えて激しさを増す。「おおうつ！　なんて女だ。こんだけハメまくってるのに、今になってマ○コが一番締まってきたやつだ。おら、このこのドスケベマ○コに中出ししてもらえるように、今度は牝犬としてじゃなく、俺たち第四小隊の副官様として、なんかエロいことやってみる！」

身体を繋げたまま見下ろす部下は、年下の上官が叫ぶであろう卑猥なセリフを期待して両目を血走らせている。自慰をしながら周りを取り囲む他の男たちも同様だ。

「ああっ！　こ、これは命令よおおつ！　クレアのぐちゅぐちゅドロドロおま○こをお、だいよんしようたい全員の、オチンポせんようトイレとしてつかいなさいい！」

肉悦の閃光に灼き尽くされようとしている脳裏に、第四小隊の副官としての記憶が走馬灯のように駆け抜けていく。隊長を補佐し、部下を叱責し、戦場では敵に向けて銃を向けた。軍のために私心を捨て、感情を捨て、氷の副官と呼ばれるほど己を律してきた。

それが今、部下たちの見守る中、これ以上ない痴態を晒している。これが訓練だという

ことも忘れ、本心から男に言われるまま卑猥なセリフを口にしてている。

「イクぞ、少尉ッッ！ 氷の副官殿の中で熱い一杯ぶちまけてやるからなあああっ！」  
曹長が抱えるクレアの両脚を力一杯引きつけながら、腰を突き出してきた。ヒクつく子宮孔に牡の砲身がぐつぷりと深く嵌まり込み——ドギユドぶどりゆどぎゆつんつ！ ドリユどぎゆドぶぶぶんつ！

子宮の奥壁にザーメンの直撃を受けた直後、その勢いと熱さに意識が吹き飛ぶ。弾かれたように顎が仰け反り、抱かれています。両脚も勢いよく跳ね上がる。

「んはあああ！ イクイクいくうううつ！ ぞーめんナカダシいつちやううううつ！」  
精液がぶち当たる勢いが、感度の上がりきったヴァギナによって増幅され、まるでマグマの大波に、全身が飲み込まれるような錯覚に陥る。はね上げた両脚は脛を僅かに八の字に開き、男の脈動に合わせて、つま先を天井に向けたまま脛が激しい痙攣をおこしている。獣の突入に合わせてダイナミックに揺れていた乳房も、今は絶頂の脈動に合わせて小刻みにプルプルと震えている。中でも腹筋のでたらめなまでのくねり方は凄まじく、まるで戦場で被弾したように激しく波打っていた。

「うおおっ！」「スゲエいきつぷりっ！」「お、おれもイクっ！」

灼熱の絶頂感の中、どこか遠くで隊員たちの叫びに似た声が聞こえたと思ひ、無意識に力一杯閉じていた瞳をゆつくりと開く。紅蓮の肉悦に灼かれた網膜に映ったのは、こちら

に向かつて降り注ぐ無数の白い筋。

ビチャッ！　びちゃちゃべチャ、ドプドぷぷぷビチャッ！

顔に、胸に、腕に、腹に——全身が部下たちの生殖液によってドロドロに覆い尽くされていく。しかしクレアは、その嗅ぎ慣れはじめた濃密な生臭さによって、さらに絶頂の炎を高くした。身体を貸すことによつて金を得るただの娼婦ではなく、男に身体を汚されることによつて金では買えない真の喜びを得る、生粋の痴女と堕ちていく。

「んばはあ！　いいイイっつ！　はてへえええっ！　もつろかけへええっ！」

気品ある美貌の象徴ともいふべき高い鼻先に、ぶつかけられたザーメンによつて、ぶくうー、と白濁の鼻提灯が膨らむ。唇の端からはだらしなく涎を垂れ流し、さらなる肉汁を求めて喘ぎ声を絞り出す。

それにより宙を飛ぶ白い筋の量が増加した。桃色に火照る肌の上には、何層にも白濁液が重ねられ、羽織ったままの軍服の上着は階級章に至るまで隙間なくドロドロに汚されていく。その一筋一筋が、激しい肉悦の痙攣によつてドロドロと滴り、絶頂を続ける帝国軍少尉の姿を壮絶に彩った。

「あーっ。……んはあー」

いったいどれだけイッたのだろうか。あまりに長くそして盛大に絶頂したため、全身の筋肉が弛緩している。痴呆のような表情で、荒い呼吸を繰り返しはじめた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**